

まちの新しい魅力づくりが動き出す大和郡山市

いま、全国各地で観光によるまちおこし、まちづくりが盛んに行われている。人口減少時代を迎え、各地域では観光活性化を図るため、地域の魅力づくりに知恵を絞り、汗をかいている。

従来は行政主導で行われていた観光活性化への取り組みも、近年は民間のNPOやボランティアが主力となって進められるケースも増えてきた。観光活性化のためには、その地の魅力となる素材を守り育てる、あるいは発掘し磨きをかけていくことが前提になる。しかし、地域の置かれた環境はまちまちであり、推進力となる組織や人材、そして保有している資源も異なる。観光活性化の進め方も自ずと違ってくる。

奈良県内でも、観光活性化への取り組みが各地各様で進行している。本コーナーでは、県内各地の観光資源の紹介と、現在進行中の観光活性化への取り組みを順次紹介していく。また、機会をとらえ、県外の先進的な観光地についても、レポートしていきたい。

初回にあたる今回は、お城と金魚のまちで有名な大和郡山市での観光活性化への動きをレポートする。

●まちのプロフィール

奈良盆地北部に位置し、佐保川や富雄川が南流している。人口約93,000人。市域は概ね平坦だが、富雄川以西では矢田丘陵が広がるため起伏が大きくなっている。古くからの市街地は近鉄郡山駅やJR郡山駅周辺に広がり、現在でも細い路地が入り組んでいる。佐保川の東側の稗田集落は、中世的な環濠集落の姿を留めていることで知られている。

●主な観光資源

大和郡山市といえば、「お城」と「金魚」のまち。どちらも、大和郡山市の地域ブランドともいえる重要な観光資源である。

郡山城跡&城下町

郡山城の築城は、今から430年近く前の1580年、筒井順慶が筒井から郡山に移ったときに始められ、1585年には、豊臣秀吉の弟、秀長が郡山城に入城し、紀伊・和泉・大和の3か国百万石の太守・大納言として本格的な城の拡張工事を行った。

徳川時代には水野勝成、松平忠明など徳川譜代の城主の後、1724年柳澤吉里が甲府より15万石を以て入城し、6代145年続いたが、1869年(明治2年)に城主柳澤保申が版籍を奉還し、明治6

年には政府の方針により城郭すべてが入札売却されている。

現在では、復元

された追手門、隅櫓、多聞櫓などが往時を偲ばせている。

町の中には魚町、紺屋町、塩町、豆腐町など昔ながらの町名が残っている。これは、豊臣秀長が商工業種別を基本とした当番制の自治制度を運営するために造った「箱本十三町」の町名が残ったものである。

箱本館「紺屋」

「箱本十三町」の「紺屋町」は、江戸時代には藍染めを職業とする人が集まっていた職人町。箱本館「紺屋」は江戸時代から続いた藍染め商の町家を再生し、藍染め関連資料や金魚の意匠を使った美術工芸品などの展示ができるようにしたミュージアム。奥にある「藍染め体験工房」では、実際に熟練スタッフの手ほどきを受けながら、ハンカ



復元された郡山城追手門

チやバンダナなどの藍染め体験もできる。



藍染め商の町家を再生した箱本館「紺屋」(玄関)



館内展示(左)と藍染め体験工房(右)

金魚

大和郡山市は愛知県弥富市と並ぶ金魚の一大産地。農家約80戸、養殖面積約100haで、年間販売量は約7,400万尾(2005年)に及ぶ。また、錦鯉も約40万尾出荷している。

大和郡山市における金魚養殖の歴史は古く、1724年(享保9年)に柳澤吉里侯が甲斐の国(山梨県)から大和郡山へ入城したときに始まると伝えられている。

幕末の頃には、藩士の副業として、明治維新後は、職禄を失った藩士や農家の副業として盛んに行われるようになった。



郡山金魚卸売りセンター

行われるようになった。

昭和40年代は経済発展と養殖技術の進歩に伴い生産量が年々増加し、国内はもとより欧米諸国や、東南アジアなど外国まで輸出された。

また、金魚品

評会が毎年4月上旬桜の花満開の頃、金魚にゆかりの深い柳澤神社で行われ、市民はもちろん、近郊の愛好家にも好評を博している。



市内にある金魚グッズ専門店(店の横には金魚すくい道場もある)

歴史的な遺跡と豊富な自然・景観

大和郡山は、大和の他の地域と異なり、戦国時代から、江戸時代、明治維新へと城下町としての歴史を刻んできたまち。城主となった豊臣秀長や柳澤家にまつわる寺院や史跡も多い。

また、市の西部に広がる矢田丘陵には、矢田寺(あじさい)や松尾寺(バラ)など花の寺としても有名な名刹があり、ハイカーにも人気のコースとなっている。



「あじさい寺」の別名がある矢田寺

ウォーキング

市では、「城下町散策コース」「矢田丘陵散策コース」「修験道コース」「田園散策コース」「古代ロマンコース」「金魚探索コース」「矢田寺八十八ヶ所霊場めぐり」など多彩な観光モデルコースをつくり、ウォーキングの魅力にあふれた大和郡山市をアピールしている。

大和民俗公園

26.6haの広大な敷地を有する大和民俗公園は、矢田丘陵の「里山」を活かしつつ、四季折々の草花や、森林浴を楽しむことができる。また、江戸時代の民家15棟も移築復原されており、自由に見学できる。

園内には、県立大和民俗博物館があり、奈良(大和)に暮らす人々が、その風土の中で育み、



県立大和民俗博物館(入口)

改良工夫をかさねながら維持してきた生活用具など民具の数々約42,000点を保存、展示公開している。

●主なイベント

お城祭り

大和郡山市で最も大きな集客イベントといえば、「お城祭り」。毎年、桜の開花シーズンに合わせて行われる。明治以来の伝統を持つ金魚品評会や源九郎稲荷神社の白狐お渡りや時代行列・市民パレードをはじめ盛りだくさんの行事が催され、夜桜も楽しめる。城の石垣にはたくさんの石仏や墓石などが積み込まれており、これらの石仏などの諸霊を慰めるため、天守台を取り巻き数珠くり法要が営まれる。

全国金魚すくい選手権大会

「金魚のまち・大和郡山」を全国にアピールし、まちおこし、地場の伝統産業の振興をめざし、平成7年に始まった。金魚すくいをスポーツ競技化



「選手権大会」風景

したユニークなイベントで、平成18年度第12回大会には、過去最高の6,000人近くの申し込みがあった。また、同年より第1回「大和郡山・金魚検定」も始まった。

女王卑弥呼コンテスト

市の観光キャンペーンレディ「女王卑弥呼」を選考するコンテスト。市観光協会が、市北西部に邪馬台国があったとする学説を基に1982年から行っている。「女王卑弥呼」に選ばれたキャンペーンレディたちは、協会関連の事業やキャンペーンで市の観光PR役を担う。



ンレディたちは、協会関連の事業やキャンペーンで市の観光PR役を担う。

歩きんとっと

歴史の息吹を伝える古い町並みや町が誇る文化遺産を、もっと身近に感じてもらおうと03年に市民の有志が実行委員会を作って開いた。本年3月には第5回「歩きんとっと」が行われ、約450名の参加者がボランティアガイドの案内を聞きながら、名所旧跡や歴史文化的建築を訪ねて市内約10kmのコースを歩いた。

■動き出す、市民の手によるまちの魅力づくり

大和郡山市は、その中心部に郡山城跡と城下町があり、それらにまつわる歴史文化資源を豊富に持つ。一方、市西部には豊かな自然が残る矢田丘陵があり、矢田寺や松尾寺など花の寺としても有名な寺院などが観光魅力を発信している。

また、大和郡山市のもう一つの顔である金魚は、市の伝統的な地場産業であるとともに、毎年全国金魚すくい選手権大会が開かれるなど、観光振興でも大きな柱となっている。

このように、多くの観光資源に恵まれた大和郡山市ではあるが、観光地というイメージにはなかなか結びついていない。それは、継続的に観光客が訪れるまちとなっていないところから来るものではないかと思われる。

春のお城まつりや夏の全国金魚すくい選手権大会は、市や民間の努力もあり多くの人が訪れるイ

ベントとして定着している。しかし、イベントの宿命ではあるが、イベント期間が終われば元の静かなまちに戻ってしまう。また、江戸時代からの城下町の風情を残すまちの中心部では、所々、マンションや駐車場に浸食されており、城下町としての統一感には乏しい。



まちのあちこちに、マンションや駐車場が…



また、観光地としての競争力という点でも厳しい環境にある。本市の西には、法隆寺・中宮寺のある斑鳩、北には薬師寺・唐招提寺のある西ノ京、さらには東大寺・興福寺などのある奈良公園がある。これらはともに世界遺産に登録された、奈良を代表する観光地であり、こと観光という点では、残念ながら、大和郡山市はこれらの有名な観光地の狭間に埋もれてきた。

このように、観光という点で不利な状況の多い大和郡山市ではあるが、最近、いくつかの、まちの活性化にむけた取り組みが動き出している。

一つは、中心市街地である城下町での取り組み。市内のPTA会長OBらが中心になって立ち上げた市民グループ「市立こおりやま委員会」と市内の「やなぎまち商店街」が06年10月から毎月1回上方の若手落語家を招いて「元気城下町寄席」を行っている。同委員会は、この他にも市内各学校のクラブや個人の発表会なども開き、市内のあちこちで人の集まるイベントを行うことによって

まちの賑わいを呼び戻そうと考えている。

一方、市西部の矢田丘陵では、地域の埋もれた歴史遺産の活用と里山整備を目的に、市内に住む定年退職者らが中心になって、2年半前にNPO法人「やまと新発見の会」を立ち上げた。

近年、周辺の開発が進んで農業に携わる人が少なくなり、丘陵にある竹やぶが荒れ放題になっている。荒れた竹やぶを整備するとともに歴史遺産を活用したウォーキングルートを開発する。また、廃材として採れた竹を活用して竹炭づくりや竹細工講習などを行い、日本の伝統文化である竹文化の再興と伝承を図るという広大な展望を描く。同NPO法人理事長の安井孝成氏は「竹やぶの再生で里山の景観を取り戻し、奈良や斑鳩に来る県外からの観光客を市中心部から矢田丘陵にも呼び込みたい」と『魅せる矢田丘陵づくり』を提唱する。



立ち枯れ竹を伐採し遊歩道を整備する



竹炭窯の火入れ

このように、大和郡山市では、市民の手によるまちの新しい魅力づくりが、いまゆっくりと動き出している。言い換えると、現在進んでいる動きは、住民が自分たちの住むまちの魅力を発掘し、理解し、再認識していく課程である。自分たちのまちの魅力を住民自身が磨き続けることができれば、斑鳩や奈良に向いていた観光客の目を自分たちのまちに振り向かせるのはそう難しくはないはずだ。
(井阪 英夫)